

表現と鑑賞を繰り返しながら、

自分にとって価値のある色や形を追求する学習

～2年「ひかりのプレゼント」の実践を通して～

盛永枝里

I はじめに

本校の図画工作科では、目指す児童の姿を、「題材や材料、学びの場と自己とを関連させながら試すことによって、自分の思いや考えを広げたり、主体的に表現し、価値をつくり出したりする姿」と押さえている。

これまでの研究では、試しの活動を軸にした学習をすることにより、個の思いや考えを作品に表すために、主体性をもって活動することができたという成果があった一方、表現と鑑賞を相互に関連させた活動が十分ではないという課題があった。鑑賞を充実させることは、多様な表現があることを知り、自分なりの価値を追求しながら表現することにつながると考える。そこで、1、2年次では「見ること」を意識した活動を行い、造形的な見方・考え方に改めて着目して表現に生かす活動を行ってきた。見たことから表したいことに合った方法を選ぶことや、自分とは異なる方法のよさや面白さに気づき自らの表現を広げていくことを更に充実させたいと考えた。

そこで、図画工作科3年次のテーマを「鑑賞を生かし、自己の表現を広げる造形活動づくり」と設定した。「鑑賞を生かし」とは、表現活動の中で自他の行為や表現を見たり、鑑賞の時間でじっくりと作品を鑑賞したりすることで、表現したことを見てその価値に気付くことや、見たことを生かして表現を行うことである。鑑賞を授業の中に位置付けることによって、児童が表現を広げることにつなげたいと考えた。

II 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童が鑑賞を生かし、自己の表現を広げるための造形活動づくりを実現するための指導の手立てを明らかにすることである。そのために、以下の3つの視点から、授業実践「ひかりのプレゼント」における児童の様子を基に分析する。

- ① 表現に生かす、「見ること」の設定の工夫
- ② 鑑賞を生かし児童の表現を広げる働き掛けの工夫
- ③ 児童の表現を広げるための評価の工夫

なお、研究の対象とした題材の概要は以下のとおりである。

1 題材名 「ひかりのプレゼント」

2 題材の目標

光を通す材料の面白さに気づき、光を通して映る形や色の見え方、見え方の変化を楽しむ。

3 題材の概要

光を通す材料を、実際に光にかざしながら並べたりつなげたりすることで変化する形や色の面白さを捉え、自分なりのイメージをもつ造形遊びの題材である。

題材の1時間目には、試しの活動を行い、光を通す材料を試す時間を確保した。試しの活動の中で、「光を通す」ことに着目させ、映る色や形などの造形的な視点を全体で共有し、題材の目標を意識させた。2時間目の表現活動では、「見ること」を活動の中に取り入れ、友達の実現や自分が使っていない材料などを見て、表現をつくり変えながら、児童が自分にとって価値のある表現を追求できるようにした。



光を通すことで映る形を楽しむ児童の姿

Ⅲ 結果と考察

1 表現に生かす、「見ること」の設定の工夫

(1) 結果

本実践では、表現と鑑賞を相互に関連させるために、造形活動をしている時にも「見ること」ができる場面を意図的に設定した。

試しの活動では、ペットボトルに光を通して形や色を映す活動を行った。活動の始めは、「映す」という活動を十分に理解できていない児童もいたが、机にペットボトルの模様が映っていることに気付いた児童の表現を、テレビに映し出して全体に共有することで、「光を通して映す」活動の確認を行った。児童は映し方を試しながら「見て見て！ペットボトルを縦にすると花みたいに映るよ。」「机から離すと大きくなった。」など、発見したことを教師や同じグループの児童に見せようとする姿が見られた。それぞれに試しを行う中で、色のついたキャップに光を通すことで色がつくことを発見した児童がおり、近くの児童から歓声が上がった。その表現を全体で紹介すると、「いいな。」「やってみたい。」「色をつけたらだめなの？」という声が児童から挙がったので、色々なキャップやマジックペンを材料に追加した。ペットボトルに色をつけたり、模様を描いたりすることで、他の児童と協力して色を重ねて見たり、ペットボトル自体を動かして映し出されるものに動きを付ける児童が現れた。そのうち、水の中に入れる児童が現れたことで、水を入れた時と入れない時の変化に気付く児童や、「水に色を付けたら面白そう。」と、やってみたいことを話す児童が出てきた。

児童が発見した方法を改めて確認するために写真を黒板に貼り、どのような方法だったのかを発表させて共有を図った。

ペットボトル以外の材料も使って表現する活動では、試しの活動で行った「向きを変える」「動かす」などの方法を別の材料でも試す姿が見られた。その中で、水を動かして映る変化をじっと見つめたり、色を少しずつ変えた色水を卵パックに並べて映したり、それぞれがやってみたい方法を使ってつくったりくりかえしたりしながら表現を追求する姿が見られた。自分の気に入った表現や、面白いと感じた発見があると「見て見て！」と伝えたいという気持ちをもつ児童が多くいた。一方で、自分の活動に没頭しているときに鑑賞のための声掛けをしてもなかなか見ることに集中できないという様子も見られた。

(2) 考察

表現をしながら鑑賞をすることは、児童の表現を広げるために効果的であったと考える。これは、児童が発見したことを伝え合うことで、「やってみたい。」「自分は今もっとこうしよう。」という次の活動への意欲となったことによると考えられる。造形遊びにおいては、没頭して表現活動に取り組むことも必要だが、自分にとっての価値を考えるためには、多様な表現があることを知る必要がある。鑑賞から多様な表現や造形的な視点を知り、自分で試していくうちに、自分にとって価値のある表現が生まれると考えられる。また、題材をまたいで造形的な視点を生かすこともできる。例えば本題材での「うろこみたいに見えるね。」といった発言は、以前学習した「見立てる」という造形的な視点を発揮したものであると言える。



写真1 試しの活動での映し方の工夫

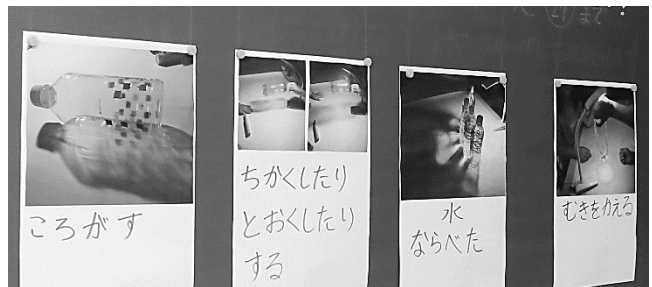


写真2 試しの活動で見つけた造形的な視点

しかし、表現活動に没頭し、鑑賞活動を十分に行うことができていなかった児童もいたことから、鑑賞する集団の大きさや、鑑賞する場の設定について、指導の工夫が必要である。

2 鑑賞を生かし児童の表現を広げる働き掛けの工夫

(1) 結果

グループでの活動を基本とし、机に一つの光源を置くことで、狭い範囲の中に児童の表現が集まっていた。一つの光を共有することで、自分の表現と友達の表現が重なり合うことに気づき、「合わせたらすごくきれい」など、友達と一緒に活動をしている児童もいた。

材料については、試しの活動ではペットボトルを1本ずつ使った。児童は、同じようなペットボトルでも向きによって色々な映し方ができると気づいた。やがて「色を付けてみたい。」「水を入れてみたい。」といった児童がやってみたいことに合わせてマジックやキャップなどを提示した。本時の活動では、児童自身が使いたい物を持ってきたり、事前に「使いたい。」と言っていた色水やセロハン、マジックなどを用意したりした。色水は、空のプリンターのインクを水につけて作り、色の三原色で透明なものを用意し、自分で混ぜて好きな色ができるようにした。また、透明なトレイやペットボトル、ペットボトルキャップなども用意しておき、児童自身が使いたい物を自由に使えるようにした。色水を卵のパックにたくさん並べたり、ちぎったセロハンを水に入れることで動きを楽しんだり、光の変化を楽しんだり、自分のやってみたいことを追求する姿が見られた。一方で、色水を混ぜて色を作ることに集中し、映す活動に時間を十分にとることができていない児童もいた。



写真3 友達と色を比べる姿

(2) 考察

グループでの活動は、児童が自然に鑑賞をするために効果的だった。また、グループに光源を一つとしたことで一か所に集まり、友達と比べたり、友達の物と重ねたりという児童同士の関わりが生まれた。友達との関わりから表現の面白さや良さに気づき、自分がよいと思う表現を追求することにつながった。

材料については、少ない材料から始め、児童のひらめきややってみたいことに合わせて増やしていくことで、児童の思考に沿って活動を広げていくことができた。特に試しの活動においては、材料を少なくしたことで造形的な視点に気づきやすくなったり、目標を意識させたりすることができたと考えられる。一方で、自由に組み合わせたり、自分では思い付かなかった材料を使ってみたりすることが、新たな表現につながるという視点から、活動やねらいに合わせて豊富な材料を用意することも必要になる。しかし、色水を混ぜ合わせるという意図していない活動に没頭してしまったことについては、今までに使ったことがない材料が提示されたことで、それを試してみたいと児童が考えたためであると考えられる。これらから、新しい材料を与える場合は、試しの活動などで十分に活動に慣れ親しんでおく必要があると考える。

3 児童の表現を広げるための評価の工夫

(1) 結果

活動中の児童の様子を見取るために、児童の姿が「ずれ」「順調」「停滞」「発展」のどの状況にあるのかを確認しながら声掛けを行った。児童の様子からは、何をしていいのか分からず活動が停滞していた児童は見られなかった。色水づくりに没頭したり、光を通さないもの自体に注目し

続けたりしている児童には、「光を通してみた?」「どんなふうに映るの?」と声を掛け、映すことに戻るように促した。しかし、色水づくりをしている児童の言葉からは「ミントグリーンで好きな色だ。」と気に入った色ができたところから映してみるという活動に移る児童や、光をほとんど通さない泥水ができた喜んでる児童、「映らないけど薄めたら映るかな。」と工夫しようとする児童などがおり、声を掛けることで児童が今何を考えて活動をしているのかが分かった。

また、「水を揺らすと映るものも動く」など他の児童にはない表現を発見していた「発展」の状況にあると感じたものについては、写真や映像を撮ることで他の児童に紹介し、活動を共有させた。しかし、自分の表現も見て欲しいという児童が多くいたため、全員への声掛けや活動の把握が十分にはできなかった。

(2) 考察

児童の姿がどの学習の状況にあるのかを考え、声を掛けることで、児童が何を考えてその行為をしているのかを知る手掛かりとなった。その時の児童の姿に対して働き掛けることで、児童の思考を捉え、行為の意味を知ることにつながった。

今後は、ICT 機器を使って画像や映像、児童の発言等を同時に記録しておくことも考えられる。他にも児童の振り返りや感想を書かせるなど、様々な情報を蓄積していくことが、題材の全体を通して評価することにつながると考えられる。

IV まとめ

本研究では、児童が鑑賞を生かし、自己の表現を広げるための効果的な手立てについて明らかにすることを試みた。そのために、「表現に生かす、『見ること』の設定の工夫」「鑑賞を生かし児童の表現を広げる働き掛けの工夫」「児童の表現を広げるための評価の工夫」の3点について、「ひかりのプレゼント」の実践を基に論を展開した。以下に、成果と課題を示す。

1 成果

- 造形活動をしながら鑑賞を行うことで、友達の表現を見て自分もやってみようと考えたり、違うことをやってみようと考えたりすることにつながり、児童の表現の幅が広がった。
- グループ活動したり、教具を共有して使ったりすることで、自然と児童が鑑賞し合う環境を作ることができた。
- 題材における児童の姿と学習の状況を考え、どのような声掛けをするのかを想定しておいたことによって、児童の表現がどのような考えや思いのもとにできているのかを知ることができた。

2 課題

- 表現と鑑賞を一体化させるためには、表現活動から鑑賞に児童の思考を切り替えるための手立てや工夫を充実させる必要がある。
- 「造形遊びをする活動」と、「絵や立体、工作に表す活動」の指導事項に合った評価の仕方を具体化する必要がある。

V 参考文献

- 小学校学習指導要領解説 図画工作編 文部科学省 平成29年7月
- 成長する授業—子供と教師をつなぐ図画工作 岡田京子 東洋館出版社 平成28年12月
- なるほど! そうか! 学習指導要領新・図工のABC 阿部宏行 日本文教出版 平成29年7月
- 小学校新学習指導要領ポイント総整理 図画工作 阿部宏行 東洋館出版社 平成29年10月